

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	日向 伸介
論文題目	近代タイにおける王国像の創出 —ダムロン親王によるバンコク国立博物館の再編過程に着目して—		
(論文内容の要旨)			
<p>タイの近代国家は、現王朝の5世王治世 (1868-1910年) に、中央集権化と国王への権力集中を進めることで、形成された。新しい国家領域とタイ史上前例のない絶対君主制に正統性をまとわせるために尽力したのがダムロン親王であった。親王は5世王の異母弟であり、1880年代には教育の近代化を担い、92年からの23年間は内務大臣として中央集権的な統治体制の整備にあたった。1915年に内相を退くと、学術・文化活動に精を出した。本論文は、ダムロン親王が、絶対君主制を正統化する国家観や歴史観を、博物館を通じて可視化していった過程を実証的に解明している。本論文は、考古学行政の整備、美術史の著述、バンコク博物館の改革に着目し、ダムロン親王が自らの政治観を表現しようとする過程を文化政策史という観点から明らかにしている。</p> <p>本論文は、まず第2章で、バンコク博物館の前史を略述する。続く第3章から第5章が主要部分となる。第3章では、タイにおける考古学行政の嚆矢とされる「古物調査・保存に関する布告」 (1924年)の経緯や意味を考察する。タイは第一次世界大戦に終戦間際の1917年に連合国側に立ち参戦した。ワチラヤーン図書館の館長を1905年の創設時から務めていたドイツ人が解雇され、代わってフランス人のジョルジュ・セデスが1917年12月に着任した。セデスはフランス極東学院の考古学者であり、タイの考古学の発展に寄与することになる。その後フランスは1922年には大使が、23年には政府が、考古学を重視するようにタイ政府に要望した。不平等条約の改正に関心を抱くタイ政府は、文明国らしく考古学行政を担う能力があることを示すために、24年に上記の布告を出した。布告を起草したのはダムロン親王であった。</p> <p>第4章では、ダムロン親王の著作『シャム仏蹟史』 (1926年刊行) について分析する。同書は、最初のタイ美術史であることが知られている。同書での仏蹟は、仏舍利、聖遺物、経、奉納品の4つを指す。同書は前半部分でインドにおける仏蹟の誕生から各国への伝播、後半部分でタイの仏蹟について述べている。同書は、ヨーロッパやインドで19世紀以後に進展した仏教研究に立脚しており、タイの仏教・仏蹟を世界史的な枠組みの中に位置づけている。親王は、仏法による統治を試みたアショーカ王について、主人が下僕を支配するような独裁的な統治を、父が子を庇護するような温</p>			

情的な統治へと改めたと高く評価した上で、バラモン教に基づくクメール式の統治を否定し仏教に基づくタイの統治を正統化する論へとつなげていった。親王は、1924年末にフランス領インドシナのアンコール遺跡やアルベール・サロー博物館を訪問したことをきっかけとして、東洋学の成果を取り入れることにより、仏蹟という具体的なものに依拠して、絶対君主制国家を再定義し支えようとしたと分析している。

第5章では、旧副王宮博物館を改変して1926年に新装開館したバンコク博物館（後のタイ国立博物館）について考察する。親王は、それまで大半を占めていた動物の剥製に代えて考古遺物を展示品の中心とした。考古遺物の多くは、内務省、地方博物館、ダムロン親王の私邸などからの移管品であった。それらは全国各地から集められたものであった。展示に当たっては、タイ国内に多数存在するクメールの考古遺物との対比において、タイ民族のすぐれた点を際立たせる配置が行われた。親王は、さらに、学校に博物館見学を促すことで、国王への忠誠心とタイ人としての民族意識に基づく愛国心を教育しようと試みた。

本論文の主張を要約すると、ダムロン親王はフランス領インドシナにおける文化行政の直接的な影響を受けつつ、偉大な国王のもとにあるタイ民族を中心とした王朝国家という王国像をバンコク博物館において可視化し、学校教育を通じて臣民に伝えようとしていた。